

3 記紀の道

日本神話は、『古事記』の上巻すべてと『日本書紀』の巻一と巻二の神代の物語のことで、これらを総称して「記紀神話」と呼んでいます。記紀神話のなかで、最もロマンチックなのがニニギノミコトとコノハナサクヤヒメの物語ではないでしょうか。ここ西都原古墳群の巨大古墳「男狭稻塚」「女狭稻塚」はニニギノミコトとコノハナサクヤヒメの御陵と伝えられ、二人の出会った「逢初川（あいぞめがわ）」や「無戸室（うつむろ）の跡」などが神話ストーリーにちなんで「記紀の道」として整備されています。



①都萬(つま)神社 ・祭神：木花開耶姫(コノハナサクヤヒメ) ・縁結び安産の神

『延喜式』の日向式内四座(都萬神社・都農神社・江田神社・霧島神社)の一社。

※延喜式とは、平安時代中期に編纂された格式(律令の施行細則)で、三代格式の一つである。三代格式のうちほぼ完全な形で残っているのは延喜式だけであり、かつ細かな事柄まで規定されていることから、古代史の研究では重要な文献となっている。



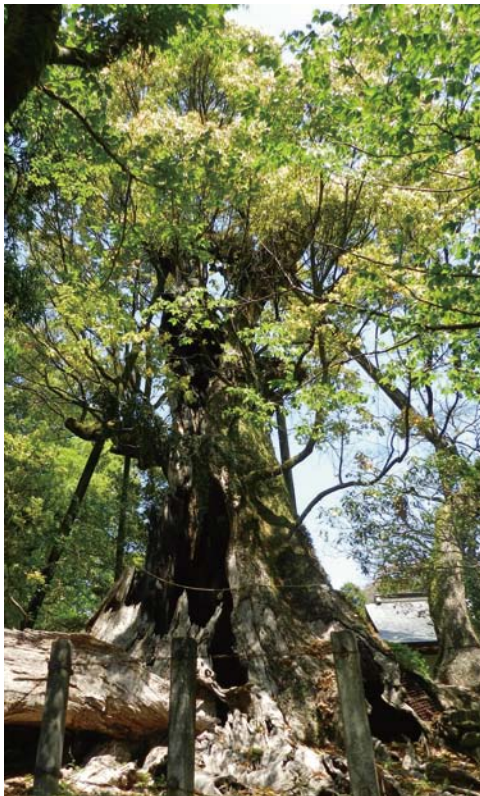
西都市の中心地・妻の市街地にこんもりとした鎮守の森があります。市民からは「さいまんさま（妻万様）」としたしまれている都萬神社です。

創建年代は明らかではありませんが、社殿の棟札に「承和4（837）年9月18日建立」の文字が残っており、さらに周辺の西都原古墳群や日向国府の地であったことを考えると相当古くからまつられていたと思われます。国府が近くにあったことから日向国総社とされ、また、都農神社に次ぐ二宮として崇敬されていました。中世には妻宮・妻万宮・日向総廟五社大明神などと呼ばれ、武家、領主より篤く崇敬され日向国の式内社4社の中では、実質的に最も有力な神社であったようです。明治6（1873）年、県社に列格しています。

祭神は木花開耶姫命（コノハナサクヤヒメ）で、社名の「都萬」は「妻」のことであり、瓊々杵尊（ニニギノミコトが木花開耶姫命（コノハナサクヤヒメ）に「われ、なんじを妻とせんと思うがいかに」と言われたからと伝えています。社伝では、木花開耶姫命と瓊々杵尊が新婚生活を送った地が現在地であると伝えています。

●都萬神社の大クス……国指定天然記念物

境内には、樹齢1200年という大クス（根回り16.4メートル、高さ40メートル）があり、「妻のクス」として国指定の天然記念物に指定されています。現在は、火災で幹内部が炭のようになっていますが、新たに枝が出て再生途中のようです。



●千年楠の洞洞木（どうどうぼく）



●本殿前の千年楠の洞洞木

都萬神社境内内に立ち生える大楠の一部で作られた木洞で慎み・長まる・通るの意から洞洞木と命名されています。

「夢かなう 幸せ招く 願いかなう」の通る木洞

「入り口の前で一礼の後、願ひごとを心の中で申しつつ木洞を潜り抜け終わって一礼してください」と案内板に書いてあります。

●日本清酒発祥の地

祭神であるコノハナサクヤヒメは、三人の子を同時に育てるのに母乳では足りないため、狭名田という細長い田をつくり、その田の稲（米）で甘酒を造り三人の御子を育てたと伝えられています。そのため、この地が清酒発祥の地であると、現地案内板では伝えていきます。都萬神社では、毎年秋の大祭には必ず甘酒を神前にお供えしてお祭りします。

都萬神社南西にあたる処に「酒元」という集落もあります。



●都萬神社と桜川物語

都萬神社の前を流れる桜川は、室町時代の世阿弥（ぜあみ）元清（1363年－1443年）が作った謡曲・桜川の、前半の舞台となった桜川だと伝えられています。貧しい母子が桜馬場（この地名は神社の近くに現存）に住んでいて、互いに思いやる親子の愛情と悲運のドラマが語り継がれています。



桜川物語

木花開耶姫に願かけて授かった申し子と貧しい母が、ひっそりと桜馬場で暮らしていました。子どもは御神木の桜木にちなんで桜子と名付けた、夫の形見の一人息子でした。

大事に育てていた桜子が、ある日東国の人買い人にわが身を売り、その代金と母親への手紙を人買いに頼んで、東国へと立ち去ってしまいました。

「母上、貧しさにやる方なく、身を売りました。お名残惜しいが、このお金で仏門に入り幸せにお暮らしてください」と記してありました。びっくりした母は、嘆き悲しみ、「桜子をお守りください」と神に祈り、桜子を捜し求める放浪の旅に出るのであります。

三年の月日が流れ、母は身も心もぼろぼろに傷つき、半ば狂女となって、常陸国磯部の桜川（茨城県岩瀬町）に、たどり着きました。磯部の桜川は、花見客でいっぱいでした。気が狂った母は、「この川も桜川、尋ねる子どもも桜子なのに、なぜ桜子は現れ出でぬのか」と、ぶつぶつとつぶやき、衣をぬらしているのです。

桜子は磯部寺で、小僧として修行の身で、住職に連れられて花見に来ていました。住職は狂女が花びらをすくう仕草に訳ありそうだと尋ねてみると、狂女は正気になって一部始終を語るのでした。住職は桜子の母に違いないと悟り、桜子を狂女に引き合わせました。桜子は、やつれて変わり果てた姿にも母だとわかり、「母上！ 母上！」と母の胸に泣き崩れ、「正に 桜子よのう」と、母子は強く抱き合い、感激の再会を果たしたのであります。

その後は、母子は連れだって再び、日向の桜馬場に帰着き、仏門に入って幸せに暮らしたという話であります。

……西都市文化連盟 看板より抜粋……

●特殊神事「更衣祭(こういさい)」

毎年7月7日に行われる更衣祭は、日本の祭りのなかでも珍しいものです。コノハナサクヤヒメとニニギノミコトが逢初川ではじめて出会い、「長狭神（ながさのかみ）」の媒介（なこうど）により嫁入りする古事そのままの姿を再現する神事です。奉仕する神職等は前日に高鍋町堀之内に浜下りし、禊ぎを行います。当日は、御神像に白衣の衣装を着付け、白粉や口紅をつけ角隠しの帽子をかぶせ祭りが行われる。

この日、氏子・崇敬者から白衣が奉納されるが、その多少によってその年の天候が占われる。

この神事が、日本の「婚礼儀礼」の初めであると、社伝にあります。

●都萬神社の大太刀

社伝によれば、景行天皇が熊襲征伐のため都於郡高屋宮におられたとき、賊徒平定を祈願して御太刀を奉獻され、現在その太刀は社殿に宝蔵されている。



日本一を誇る大太刀（長さ 3.5 メートル）

●都萬神社境内の様子



桃山様式の優雅な本殿



日本最初の結婚式が行われたといわれる縁結びの神様らしく、境内にはたくさんの願いごとが。



神社の紋章は「桜」



本殿右手に三つの摂社が並んでいます。写真はコノハナサクヤヒメの父・大山祇神



神社の横に、桜川から水を引き込んだ池があり、ほとりにはスサノオをまつた祠が佇んでいます。



神社の横に日下部氏発祥の地といわれる「日下部塚」があります。日下部氏は古代日向の代表的豪族で、都萬神社の祭祀に携わりながら勢力を拡大していきました。

②御舟塚(みふねづか)

地上に降り立ったニニギノミコトの一行が舟に乗って着いたところで、その時の舟が祀られているといわれています。

御舟塚は、現在は交通量の多い県道 24 号に面していますが、当時この辺りは奥深い海の入江で、古事記にでてくる「笠沙碕(かささのみさき)」はこの地であると伝えられています。



③逢初川(あいぞめめがわ)

ニニギノミコトが、水を汲みにきていたコノハナサクヤヒメと初めて出会い、見そめられた場所といわれています。細い流れですが、今でも奥の方からしみずが湧き出ています。なお、高千穂町にも同じ名の川があり、同じ伝説が残されています。



●神話……コノハナサクヤヒメとニニギノミコト……

アマテラスオオミカミの孫、ニニギノミコトは日向の高千穂に降臨しました(天孫降臨)。ある日、ニニギノミコトは笠沙(かささ)の御埼(みさき)で美しい女性と出会いました。コノハナサクヤヒメです。一目で心を奪われたニニギは、その場で結婚を申し込みました。

話を聞いた父のオオヤマツミの神は大いに喜び、結婚を承諾しました。そして、たくさんの結納品とともに姉のイワナガヒメもそえてニニギに送りとどけましたが、イワナガヒメがあまりにも醜かったので、ニニギは返してしまいました。そして、コノハナサクヤヒメと一夜をともにしました。

翌朝、オオヤマツミの使者がニニギのもとを訪れ「二人を送った理由は、イワナガヒメは永遠の命を、コノハナサクヤヒメは木の花が栄えるようにニニギの御世が栄えるようにと祈誓(うけい)をかけて」送ったと伝えました。そして、「コノハナサクヤヒメ一人を留めたので、天の神の御子の寿命は花のようにはかなくなるでしょう」と申しました。

後にニニギの子孫が永遠の命ではなく、人と同じ寿命になったということです。



やがてコノハナサクヤヒメに赤ちゃんができたことをしらされたニニギは、「たった一夜のちぎりで子どもができるわけがない。見知らぬ国つ神の子どもであろう」と言ったので「もしも国つ神の子なら無事に生まれないでしょう。天の神の子なら無事生まれるでしょう」といい、窓も戸もない産屋をつくって中に入り、出産の時に火をつけました。

炎の中で、ホデリノミコト、ホスセリノミコト、ホオリノミコトの三柱の男神を産みました。後にホデリノミコトは海幸彦、ホオリノミコトは山幸彦として知られます。

④八尋殿(やひろでん)跡

逢初川のすぐ近くに八尋殿(やひろでん)跡があります。ニニギノミコトとコノハナサクヤヒメが事勝神(コトカツカミ)の仲人によって結ばれ、二人の新婚生活のために建てられた御殿の跡と伝えられています。

館は縦八尋(ひろ)(約15m)、横八尋(ひろ)の家であったことから、この地方の人たちが八尋殿(やひろでん)と名付けて跡地を保護しました。

ふるくは周辺に土塁もありました。



「尋(ひろ)」は、大人が両手を広げたときの長さを表します。八尋殿は、八人が手を広げてつないだほどの大きさの建物だったことになります。

⑤無戸室(うつむろ)跡

逢初川から約400m歩くと大きなケヤキが目には枝を広げています。無戸室(うつむろ)跡です。コノハナサクヤヒメが出産のために造った産屋(うぶや)の跡と伝えられています。たった一夜で子を身ごもったことをニニギノミコトから疑われたコノハナサクヤヒメは、身の潔白を証明するため、戸の無い産屋に入り、燃えさかる炎の中で3人の皇子を生んだといわれています。



⑥児湯の池(こゆのいけ)

昔時この周辺は水のごった沼地の多いところでしたが、児湯の池だけはきれいな水が湧き、里人たちは「洗ん子(あれんこ)」と呼んでいました。それはニニギノミコトに嫁がれたコノハナサクヤヒメが、出産された三皇子の産湯としてこの池の水を使われたという事から起こりました。

この地方の古くは児湯県(こゆのあがた)、児湯郡と称しました。「児湯」の地名発祥の地とも言われています。



⑦石貫神社(いしぬきじんじゃ)

コノハナサクヤヒメの父である山の神オオヤマツミが祭神です。鬼と「一晩で岩屋を完成させれば娘を嫁にやる」と約束したオオヤマツミが、完成した岩屋から1枚抜き取って投げた石が落ちた場所といわれています。

参道の入口にはその石が据えられています。





流麗な石貫神社本殿



参道入り口には、投げた石がここまで飛んできたといわれる石がか置かれている。

●石貫階段

石貫神社から西都原古墳に向かう途中の坂道に差し掛かったあたり、左手の急斜面にある長い階段が「石貫階段」です。

170 段の急な階段を上ると、西都原の台地上に広がる古墳群です。改めて、古墳群は 70～80m の台地上にあったと思い知らされます。階段を上ったすぐ目の前が、石貫神社と縁の深い大山祇塚（オオヤマツミヅカ）です。

この石貫階段は、石貫神社の熱心な信者さんが昭和初期に寄付したそうです。



⑧大山祇塚(おおやまつみづか)

コノハナサクヤヒメの父・オオヤマツミノカミの御陵と伝えられている柄鏡式前方後円墳で全長約 90m です。第二古墳群のほぼ中央にあり、90 号墳とも呼ばれます。



⑨鬼の窟古墳(おにのいわやこふん)

西都原の中央部、男狭稲塚・女狭稲塚の東南約 300m の地点に位置します。西都原古墳群で唯一の横穴式石室を持つ円墳で、墳丘の外側に土塁をめぐらせています。

※詳しくは P-12



⑩男狭稲塚・女狭稲塚(おさほづか・めさほづか)

西都原古墳群のシンボリックな古墳で、男狭稲塚は国内最大の帆立貝形古墳で長さ約 175m。ニニギノミコトの墓と伝えられていますが、諸方君牛諸井の墓とも考えられています。女狭稲塚は九州最大の前方後円墳で長さ約 180m。伝承ではコノハナサクヤヒメといわれますが、仁徳天皇妃の髪長媛(かみながひめ)の墓とも考えられています。

※詳しくは P-11

